



その7

織田信長

—おだのぶなが—

(平成22年2月1日号—第265号)



明応5年(1496)蓮如[れんにょ]が摂津大坂に建立した御坊は、天文元年(1532)山科本願寺が焼き討ちされて以後、大坂(石山)本願寺として浄土真宗の本山となりました。寺内町[じないまち]が点在する枚方地方は、淀川舟運により大坂本願寺と直結しており、真宗勢力の有力拠点となりました。

天下統一をめざす織田信長は大坂の地を重要視し、本願寺に矢銭[やせん]5000貫を課しただけでなく、その地の明け渡しをも要求していました。本願寺顕如[けんによ]は信長と戦う決意を固め、元龜元年(1570)6月信長が浅井・朝倉連合軍と姉川で戦っているすきに乗じて7月摂津に布陣した三好三人衆と連携する形で反信長の旗幟[きし]を鮮明にし、ここに11年にわたる合戦の幕が切って落とされました。

信長は3万余の軍勢を率いて上洛し、8月25日には枚方寺内に陣取、翌26日天王寺に本営を構えました。

その行路に当たる招提寺内は、本願寺に味方しない姿勢を示したため、9月には信長から安堵状[あんどじょう]が下されました。招提寺内と信長とのこうした関係は、この後も続いたらしく、元龜3年には柴田勝家・佐久間信盛連署[れんしよ]の禁制が招提寺内に下付されています。

一方、信長が枚方寺内に陣取ったのは、枚方寺内が信長に敵対したためと考えられます。平成14年、大隆寺(枚方元町)境内で行われた発掘調査で、枚方寺内の油屋の甕[かめ]倉と見られる遺構が見つかりましたが、備前焼の大甕の多くが人為的に破壊された状況で検出され、建物跡も焼土層で覆われているなど、信長陣取との関連が注目されています。



昭和29年の招提
(市史資料室所蔵)